

「神への信頼 たとえそうでなくても」

ダニエル 3：14～18

吉岡たすくさんという児童文化を研究された先生がいます。吉岡さんは先生に嫌われる子どもだったそうです。そのなかで、彼が「コオロギ先生」と呼んだ一人の女性の先生との出会いがありました。あるとき、コオロギ先生の顔のそばにクモが近づいたのを見て、彼は黒板消しをクモに向けて投げつけます。そこを通りがかった別の先生が彼の行為を見て、先生に投げつけたと勘違いをし、彼を職員室に引っ張っていき「お前は昔から悪いやつだ！何も変わっていない！」と叱ります。コオロギ先生は「彼はそんな子ではないです」と伝えますが、その先生は聞く耳を持ちませんでした。しばらくして、吉岡さんはコオロギ先生が書いた日記を見ます。そこには「わたしはこの子を信じる。この子はそんな子じゃない。彼があつたとき投げたことには何か理由があるはずだ。」と書かれています。それを見たとき、吉岡さんは“人を信じる先生になる”と決意します。実際に、彼は先生となり学校長を勤め、著書やテレビなどおして教育について多くの活動を残しました。いつの時代も私たちは人を変えようとしています。しかし、吉岡さんを変えたのは、一人の先生の信じる力だったのです。

■ 罪とは何なのか!? 試練と誘惑

『もしそんなことになれば、わたしたちの仕えている神は、その火の燃える炉から、わたしたちを救い出すことができます。また王よ、あなたの手から、わたしたちを救い出されます。たとえそうでなくても、王よ、ご承知ください。わたしたちはあなたの神々に仕えず、またあなたの立てた金の像を拜みません。』(ダニエル 3:17-18)

捕囚の民として連れて来られたシャデラク、メシャク、アベデ・ネゴは、王がつくった金の像を拜まない者は燃える炉の中に投げ込むという命令をうけます。民がその命令に従うなかで、彼らはその像を決して拝むことにはしませんでした。彼らは試練のなかで、神様を信頼する信仰を貫いたのです。

私たちは試練と誘惑を理解し、区別しているのでしょうか?

試練は「正しいことを行おうとするときにうまくいかないこと」です。誘惑は「何か原因があって自らで間違いを犯してしまうこと」です。多くの場合私たちはこの誘惑と戦っています。自ら間違っただ道を選んでしまっ、とげだらけの茂みに入ってしまう、そこから抜け出そうとしない。そこで「神様がいるならなんで助けてくれないのだ。」と嘆いているのです。道を外した状態です。だからもう一度正しい道に戻らなければならない。その決断をするために神様は教会の家族、セルのメンバーを与えてくださっているのです。誘惑とは、人を救さないこと(自分は正しい、間違っていない)ということ。カインも同じ誘惑を受けた人でした。カインは捧げた捧げものを神様に受け取ってもらえなかったことで、アベルに嫉妬し、殺してしまいます。本当の問題は神様に捧げものを受け取ってもらえなかった、ということだけなのに、カインはアベルを敵にして憎んでしまいました。私たちはいつもこうして根源のおき替えをし、憎むべきでない人を敵にしてしまいます。そしてカインはアベルを殺してしまいました。私たちはこの殺すという行為を罪だと思いますが、それは行為によってできた罪の実であり、カインの心に入ってきた「私は正しい」という言葉が罪なのです。『罪は戸口で待ち伏せして、あなたを恋慕している。だが、あなたは、それを治めるべきである。』(創 4:7) カインはアベルを殺すという行為以前に、罪を犯していたのです。

私たちの人生のなかで悪いことが起こったのなら、それが試練なのか誘惑なのか見極めましょう。見極めることと戦い方が分かれば、それが誘惑なら悔い改めましょう。もしそこで許せない相手がいるなら「イエスの御名によって赦す」と声に出して宣言しましょう。声に出すことによって、その決断が確かなものにされ、神様が働いてくださいます。そしてそれが試練なら、そのなかで仲間が与えられ、諦めずに進むなら、私たちは神様の計画を見るのです。

■ 正しいことを行うとき、与えられる助け手

私たちが試練のなかにあつて正しいことをしようとするとき、神様は助け手を与えてくださいます。ダニエルには、シャデラク、メシャク、アベデ・ネゴという3人の同僚がいました。

捕囚の民として連れて来られたときから多くの試練が彼らにありました。偶像に捧げられた王の食事を食べなかったときも、その4人の信仰を見て、高官は彼らを愛するようになりました。その問題が試練かどうかを見極めるのは、助け手が与えられるかどうかです。ダビデにはヨナタンが、ローマに向かうパウロには百人隊長が与えられました。都合のよいことを言ってくれる人が仲間ではありません。私にとって嫌なことを言ってくれる人、一緒にいてくれる人を大切にしましょう。自分を犠牲にしてでも命をかけてくれる助け手が与えられます。そうして神の計画は進んでいきます。

■ 心から始まる行為! すべては信頼から始まる恵み

シャデラク、メシャク、アベデ・ネゴは、熱い炉のなかに投げ込まれるという試練のなかで、神様が救い出してくださいと信じていました。しかし、「たとえそうでなくても」神様への信頼が揺らぐことはありませんでした。一番の誘惑は行動というルールです。ルールを守り、正しいことをしていても、心がともなっていなければその行動は無意味です。しかし、私たちは行動で正義をあらわそうとしてしまいます。正義は、聖書と自分の行動を照らし合わせて自分自身を測るための道具であり、人を測るものではありません。私たちが人に正義を向けるとき、それは私たちが神になる瞬間です。私たちは罪人であることを理解しているのでしょうか? 神様を信頼しない行為、それが罪です。心の中を探りましょう。もし今、傷ついたら心があるなら、その記憶が癒えるまで祈り続けましょう。カインはアベルがいる以上、この傷は癒えないと騙されてしまいました。イエス様は私たちの過去の傷を癒すために十字架にかかられました。心から始まる行いによって、すべての信頼から始まる恵みが、私たちの人生におとずれます。

■ 試練の日に間違っただ決断をしない、妥協をしない

ですから、試練のときに間違っただ決断をしないことです。王の命令を受けたとき、シャデラク、メシャク、アベデ・ネゴの3人が、王を見て、妥協して金の像を拜んでいたなら、イスラエルの民の将来は暗いものになっていました。しかし、彼らの神様を信頼する信仰によって、神様は彼らを守り、その奇跡を見た王は、彼らが神様を礼拝することを許し、彼らを栄えさせました。『あなたがたの会った試練はみな人の知らないものではありません。神は真実な方ですから、あなたがたを、耐えられないほどの試練に合わせることはなさいませぬ。むしろ、耐えられるように、試練とともに脱出の道も備えてくださいます。』(第1コリ 10:13)

あなたは誰を見えていますか? 強いリーダーではなく、神様を見るリーダーが必要です。神様の御心を知った受動的指導者は妥協をしません。99%が敵であっても、それが試練ならば、私たちは神様を信頼するという勝利者のマイノリティを選びます。シャデラクたちは、神に信頼することを彫刻のように刻みこまれていました。私たちは神の作品になりましたが、いつの間にか石のように鎧を着てしまい、作品を損なってしまいました。ですから、私たちはもう一度削られて、整えられたあなたを、神様は価値のある姿に戻したいと思っています。安息日を聖なる日として尊びましょう。これが神様を信頼することです。ダニエルたちは、捕囚の民として連れて行かれた敵の地でも、日に3度エルサレムのほうを向いて祈っていました。礼拝を尊ぶ彼らの祈りを神様は聞かれました。『二人または三人がその名によって集まるところには、私もその中にいる。』(マタイ 18:20)

人の目を気にしていませんか? 評価されることが必要でしょうか? 私たちは神様の道を貫くために礼拝をしています。神様との信頼関係を回復しましょう。すると、私たちの価値が人々の前にあかしされ、私たちは敵の地で繁栄します。「神よ私を探り、心を知ってください。私のなかに傷つける心があるかないかを見て導きたまえ。とこしえの義の道に」神様に信頼するものになっていきましょう。

(要約者:岡本享子)

(2020年11月8日)